慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「莎菲女士の日記」にみる丁玲の恋愛・結婚観： 一九二〇年代の中国における知識人女性の生き方をめぐって
Sub Title	Ding Ling's views on love and marriage in "Miss Sophie's Diary": an intellectual woman's way of life in China in the 1920s
Author	松倉, 梨恵(Matsukura, Rie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2013
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.104, (2013. 6) ,p.55- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01040001-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「莎菲女士の日記」にみる丁玲の恋愛・結婚観

――一九二〇年代の中国における知識人女性の生き方をめぐって――

松倉　梨恵

一、はじめに

「莎菲女士の日記」は、一九二八年に『小説月報』第一九巻第二号に発表された丁玲の第二作目の小説であり、丁玲初期の代表作である。この作品は発表以来、注目を集め続けてきたが、その評価は時代とともに、丁玲自身の評価に伴って、幾度かの変遷を経ている。

ここで、この作品の主人公である莎菲についての評価の変遷を見てみよう。作品発表とほぼ同時代、銭謙吾は莎菲をはじめ丁玲が描く女性を「封建意識というものが微塵も存在しない」「近代的女子」であるとし、[1]茅盾は莎菲を「個人主義で、旧礼教の反逆者」「『五四』以後の解放された若い女性たちの、性愛における矛盾した心理の代表者」であるとし、[2]それぞれ高く評価した。その後、整風運動の中で起こった丁玲批判の際にはこの作品も批判を受け、周揚は莎菲を「恐ろしい虚無主義的な個人主義者」「没落階級における退廃傾向の化身」であるとした。[3]文化大革命が終わって丁玲が名誉

回復されると、この作品に対しても再評価が行われた。袁良駿は先の周揚の批判に反対し、莎菲を「封建礼教と世俗社会のしがらみを破った」「『五四』運動の薫陶を受けた、志を持った新女性」であるとして、莎菲を擁護した。[4] 銭謙吾が莎菲を「近代的女子」と呼んだのに始まり、莎菲は丁玲批判の時期を除いて、「旧礼教」「封建思想」に反抗する「新しい」女性と見なされ、そのために高く評価されてきたのである。

莎菲という女性像について、江上幸子は清末から日中全面戦争開始までに生まれた「新婦女」に関する言説をⅠ「良妻賢母」期（清末～）、Ⅱ「ノラ」期（一九一〇年代半ば～）、Ⅲ「職業婦女」期（一九二〇年代半ば～）、Ⅳ「新女性」期（一九二〇年代末期～）、Ⅴ「労働婦女」期（一九三〇年代初期～）の五つの時期に区分した上で、丁玲の初期作品の主人公たちを、当時「モダンガール」と呼ばれていた「苦悶する新青年女性たち」であるⅣ期の「新女性」であったとしている。[5]

ここで、莎菲を取りまく登場人物を見てみると、凌吉士、葦弟、雲霖、毓芳、その他友人たちのいずれもが、都会で生活する教育を受けた青年男女であり、当時「新しい」部類の人間に属していたはずである。また、莎菲の父親は理解のある人物のようで、莎菲に旧式の結婚を迫るようなこともない。だがこの作品への再評価後の論文を見てみると、吉士の生き方を「封建」と言う者[6]もあれば、葦弟の自分勝手な愛を「封建」と言う者[7]、また雲霖・毓芳の恋愛を「封建」と言う者[8]もあり、登場人物たちの何が「封建」なのかについては、一致していない。

こうして見ると、人々が「新しい」「近代的」「旧い」「封建的」などと言う時に、何をもって「新しい」「近代的」と言い、何をもって「旧い」「封建的」と言っていたのかは、その人の立場により異なっており、それぞれ自分が正しいと思う主張が「新」しく「近代的」で、それと反対の意見は「旧」くて「封建的」だと言って非難していたと考えられ

る。

それでは実際のところ、作品が発表された当時において、莎菲および他の登場人物たちの恋愛・結婚における立場はどのように理解されていたのか。本論文では、この作品における莎菲および他の女性登場人物を中心に、彼女たちの立場を、当時の中国における恋愛をめぐる具体的な言説の中に位置づけて考察し、莎菲ひいては丁玲の恋愛・結婚に対する態度を明らかにしたい。

なお、本論文では「莎菲女士の日記」の日本語訳は、岡崎俊夫訳『霞村にいた時』（岩波書店、一九五六年）に収められた「莎菲（ソフィ）女士の日記」を使用した。[9] その他、本論文で用いた中国語の文章の翻訳で注記のないものは、拙訳によるものである。

二、一九二〇年代中国の女性を取りまく状況

（一）霊肉一致と恋愛悲劇

一九二〇年代の中国では、「霊肉一致」が恋愛において最も重要なテーマとなっていた。「恋愛」という概念が初めて中国に入ってきた頃、「恋愛」は肉欲を排した純粋に精神的な愛情、つまり「プラトニック・ラブ」として理解されることが多かったようだが、一九二〇年代に入ってから、恋愛というのは単に精神的なものではなく、精神の愛と肉体の愛の融合であるべきだという主張が、当時の進歩的な女性雑誌であった『婦女雑誌』などを中心になされていた。[10]

一九二五年には、『婦女雑誌』第十一巻第一号において、編集長の章錫琛のもとで「新性道徳號」が組まれ、新性道徳

論争を引き起こした。これが原因で章錫琛は後に『婦女雑誌』編集長の職を解かれることとなるが、ここで彼は以下のように「霊肉一致」の「新しい性道徳」を説いている。

従来の性道徳の考え方で、最もおかしな点は、性行為が結婚という形式を踏んだ男女二人の間でのみ為されるものと規定していることである。彼らは結婚という形式を、まるで一切の不道徳を道徳に変えることができる、無上の神通力をもったもののようにみなしている。すでに成年となり、責任能力を備えた男女が、双方の合意により結ばれる。これは、どのような面からみても、社会と個人に有害であろうはずがない。しかるに、一般社会は常にこれを不道徳とみなしてきた。新しい性道徳では、男女間の性的行為は、その結果が社会に害を及ぼさないかぎり、個人的関係と考えられるだけであり、決してこれを不道徳と言い立てることはできない。(11)

章錫琛は性道徳の根拠を「結婚という形式」ではなく「個人的関係」に求めたのであった。このことは、結婚せずに同棲することや婚外交渉を持つことも認めるものであった。一九二八年、章錫琛が『婦女雑誌』を離れた後に創刊した雑誌『新女性』には、下記のような投稿が掲載されている。

F女士はWと愛し合い、結婚の手続きを経ずに同居を始めた。このことでFとWは社会から侮辱を受けることとなり、議論紛糾し、同郷の人たちは同郷だという資格で二人を責め立てた。（中略）そこで私は面倒を避けるために儀式をしてもいいのではないかと思った。そこで私がFにそう伝えると、Fはこう答えた。「くだらない、二人

の間でキスしたり、抱き合ったり、それからもっと深い関係になるのにも、どうして世間を欺く取引のような結婚の儀式なんてしなければならないのよ。[12]」

そして同じ頃、中国では恋愛をめぐる悲劇的な事件が数多く起こり、当時の新聞・雑誌の紙面を賑わせていた。以下に、いくつかその例を挙げる。

一九二三年、梅女士が不幸な死に至るまでの顚末が『婦女雑誌』で伝えられた。梅女士はCh君と恋愛して結婚をしようとしたが、父親に反対されたため、新聞に声明を出して父親と縁を切った。しかし結婚後、一人で故郷に帰った夫は家族の圧力に負け、親の決めた相手と結婚すると手紙で梅女士に告げた。梅女士はショックのあまり病気になり、Ch君を恨みながら亡くなった。[13]

また一九二四年には、黄女士が自殺未遂した事件が『婦女雑誌』に紹介された。黄女士は幼い頃に親の決めた婚約者がいたが、年頃になってその婚約を不満に思うようになり、婚約を解消した。父親は怒って、彼女に三〇〇〇元を与えて親子の縁を切った。その後、黄女士は王君と恋愛結婚し、持っていた金を全て王君に渡したが、後に、彼にはすでに妻がいたことを知る。さらに王君は金を得ると態度も豹変し、暴力をふるうようになった。黄女士は後悔のあまり飛び降り自殺を図った。[14]

一九二八年には、馬振華の自殺をめぐる話題が上海の世論を騒然とさせた。汪世昌と馬振華は恋愛し、婚約中に肉体関係を結んだが、汪世昌は馬振華がすでに処女ではなかったとの疑いを持ち、別れを告げた。その後、馬振華は黄埔江に身を投げて自殺した。馬振華の自殺を知った汪世昌は、自身も川に飛び込んで自殺未遂を起こすが、後にそれは世論

の圧力を恐れて起こした自作自演の自殺未遂騒動であったことが判明。この事件は、上海の多くの新聞や雑誌でゴシップ的に取りざたされた上、小説や舞台にもなって演じられた[15]。

これらの事件に共通していたのは、自由恋愛をして相手と性交渉を持った知識人女性が、後に男性から捨てられたことを悲嘆して、病死や自殺という不幸な結果に終わるということであった[16]。男性は、旧思想によっても新思想によっても、恋愛経験が豊富であることが問題とされることはなかった。しかし女性は処女を失うと、多くの男性から恋愛や結婚の対象から外されたり世間から冷たい目で見られたりと、男性に比べ厳しい状況に置かれていた。こうした女性にとって不利な現実が、女性に将来を悲観させて悲劇を引き起こしたと言えるであろう。こうして見ると、「霊肉一致」の恋愛観に基づく自由恋愛での失敗は、女性たちを死に導く可能性を秘めていたと言うことができる。

（二）モダンガール

一九二〇年代末頃より、中国の都市では「モダンガール」と呼ばれる女性たちが急増した。「モダンガール」とは、「チャイナドレス」「ハイヒール」「ストッキング」「白粉」「口紅」「パーマ」といった、当時流行した西洋式のモダンなファッションに身を包んだ女性たちのことである。この「モダンガール」に対しては、しばしば批判的な見方がされていた。一九三一年、天津『大公報』には「モダンガールと良妻賢母」という文章が掲載され、ここで「近年、少しばかり教育を受けたいわゆるモダンな女学生たちは、流行を追い新文化を語るために、一人として良妻賢母を否定しない者はない。良妻賢母が女性にひどい侮辱を与えるものだと考えない者はいないのだ[17]」と、良妻賢母を否定するモダンガールが非難されている。

「モダンガール」は、本来は女性の外見的特徴を指すものであったが、後にその道徳観念についても言及されるようになった。董玥は、以下のように指摘している。

（要約）当時の都市部では、良家の子女だけでなく女工や農村出身の女性までもが皆同じようにモダンな格好に身を包んで上流階級の男性を誘惑するようになり、モダンガールという外見が階級や階層の境界線を曖昧にし、エリートたちの結婚市場の純潔性に脅威を与えるようになった。そして、これに対抗する策として「真のモダンガール」という言説が生まれた。一九三三年から一九三四年にかけて出版された『婦人畫報』では、「真の」モダンガールになるためには「道徳の質」が必要であり、映画、体育、読書、ダンス、音楽、手芸といった各方面で修養を積むようにとの主張がされている。また同誌は女性読者に対し、こうして様々な修養を積む目的は、現代男性を魅了し彼らに釣り合う伴侶となるためであることを忘れないようにと忠告する。[18]

『婦人畫報』の主張では、「真のモダンガール」となることの目的は現代の男性にとっての良き妻となることなのであった。

このように、当時の文章において「モダンガール」が語られる時、その多くは批判的に語られるか、現実のモダンガールを非難した上で理想のあるべきモダンガールの姿が述べられることが多かったようである。そして、「良妻賢母」としての役割を拒否することが、「モダンガール」を非難する理由となっていたのである。

（三）新思想旧道徳の女性形象

妻としての役割を拒否した「モダンガール」が非難の対象となる中で、男性たちにとって理想の女性像となったのが「新思想旧道徳」の女性たちであった。都市に出てきた当時の知識人青年たちの多くは、伝統的な大家族に代わって西洋式の核家族からなる新式家庭を築こうとしていた。そうした男性たちにとって、無学な旧式の女性はもはや理想の結婚相手ではなくなり、代わって新式教育を受けた女性が理想の結婚相手となっていた。それは、新式教育を受けた女性こそが新式家庭の妻として夫を助け子どもを教育することができると考えられたためであった。[19] 章錫琛はこの「新思想旧道徳」について、以下のように批判している。

「新思想旧道徳の新女子」、これはなんと矛盾した言葉だろうか。しかしこれこそが、現代において非常に美しくて流行している言葉なのだ。我々が日頃目にする新女子のうち、新思想旧道徳でないものはほとんどいない。このような女性こそが、現代の一般的女性にとって唯一のモデルなのである。

新というのは思想上のものである。彼女たちは断髪したり、チャイナドレスを着たり、ストッキングとハイヒールを履いていたり、女性解放や男女同権、さらに最も流行の国民革命について語ったりもする。しかし彼女たちの道徳観念について考えてみると、彼女たちは依然として親孝行や勤倹・貞淑、夫唱婦随を崇拝しているのだ。旧式のお嬢さんが新式の衣服をまとっている、これが現代のいわゆる「新女子」なのだ。[20]

この「新思想旧道徳」の女性たちは、モダンな外見に「良妻賢母」にふさわしい道徳を備えた「理想のモダンガール」

とも重なると言えるだろう。章錫琛は『婦人畫報』とは逆の立場から、「新女子」と言われる女性たちのなかに根強く残る古い道徳観念を批判して「新思想旧道徳」だと言っている。ここで、「新思想」の必須条件は新式の教育を受けているということであった。一方、「旧道徳」として挙げられた項目は様々なものがあったが、共通していたのは、「良妻賢母」となるのに必要と考えられる事柄であった。そして、この「新思想旧道徳」の女性像は男性からも女性からも受け入れられる「新女子」として流行していたのである。

（四）女性同士の親密な関係

五四期以降、一九二〇年代には多くの女性作家の手によって女学生同士の同性愛、もしくは同性愛に近い愛情をテーマとする物語が書かれた[21]。当時、こうした女学生同士の恋愛は、女学校という新しく生まれた知識人女性たちの集まる空間において、実際によく起こっていたようである。劉伝霞は、当時の知識人女性たちの間で、家から外へ出ても男性と接する機会が少なかったことや男女が自由に交際することが難しかったことから、恋愛感情が同性に向けられるようになり、同性愛的な感情が生まれていったとしている[22]。また、常彬は以下のように指摘している。

「五四」時代の女性が描いた女性同性愛をテーマとする作品は、その多くが厳格な意味における同性愛を描いた作品ではなく、一種の友情を超えた、互いに慕い同情し合う親密な（あるいは曖昧な）、異性愛に似ているけれども基本的には性的関係の伴わない精神的な親密な関係であり、準・同性愛または同性間の情誼（姉妹の情誼）といった性質の、女性同性愛の「サブ・テキスト」なのである[23]。

ここで重要なのは、当時の文学に登場した女性同士の親密な関係は、基本的に性的関係の伴わない「同性間の情誼」とも言うべき精神的な愛情であったということである。常はまた、女性同士のそうした関係が流行した理由として、男女で性規範が著しく不平等であったため、男女が互いに理解し合うことが難しかったことを挙げている。[24] 確かに、男性は恋愛で失敗したとしてもまた他の女性と恋愛すればよく、そのことは新道徳からも旧道徳からも問題とならないが、女性にとって恋愛の失敗は死という結果を招く可能性を秘めていた。このような状況下では、女性が男性と理解し合うことは難しく、むしろ同じ弱い立場にあった女性同士の方が、理解し合いいたわり合うことができたのだと考えられるのである。

三、作品分析

ここまで、「莎菲女士の日記」の発表当時の女性をめぐる状況を明らかにしてきた。本章では、これらの事柄を軸にして「莎菲女士の日記」の解釈を試みたい。

（一）蘊姉さま・剣如と「女性同士の親密な関係」

小説の冒頭から、莎菲は肺病を病み、また「私は毎日待ち、やりすごし、ひたすらこの冬が少しでも早く過ぎ去ってくれるようにと祈っている」「全く何もかもいやなものばかりだ」（十二月二十四日）[25] と、憂鬱な気持ちで暮らしている。

この憂鬱の原因は、どこにあるのだろうか。

これは、莎菲の親友であった蘊姉さまが結婚したことで、それまでの蘊姉さまとの幸せな関係を失ってしまったためだと考えられる。莎菲は物語の冒頭から「私は、はっきり私を理解できる人がいてくれればと思う。私を解ってくれないなら、愛やいたわりを求めても何になろう」（十二月二十四日）[26]と言っている。また凌吉士のことで思い悩んでいる際にも、「ただ泣きたいのだ。私をその胸に泣き伏せさせてくれ、『私、また自分をダメにしちゃったのよ』といわしてくれるような、そんな人がいればいいなと思う。しかし誰が私を理解し、抱擁し、慰撫してくれよう。そこで、私はしかたなく笑いながら『私、また自分をダメにしちゃったのよ』といって泣きむせぶのだ」（三月十三日）[27]と記している。

さらに、その数日後には、前年のことを回想しつつ「去年の今時分の生活はどうだったろう。蘊姉さまは目に入れても痛くないほど私をあまやかし可愛がってくれたので、私は仮病を使って床から離れなかったものだ。蘊姉さまから愛撫してもらいたいばかりに、おろおろして私を慰める言葉もなく早や流れ出す涙の味を慕って、机にうつぶして何でもない不満ごとを考えてはめそめそ泣いたものだ」「友人は何人もいて非常に私を大事にしてくれはするが、その私との関係はとうてい蘊姉さまの愛情とは比較にもならない」（三月二十一日夜）[28]と書いている。つまり、もともと彼女を理解し、抱きしめ、慰めてくれていたのは蘊姉さまだったのである。ここで、岡崎訳の「愛撫」という言葉は、日本語では愛情の表現としてなでたりさすったりするという意味で使われており、性的なイメージを連想させるものであるが、原文は「撫摩（なでる、さする）」であり、ここに性的な意味合いはないと考えられる。

莎菲は、前年には蘊姉さまという存在があった。しかし、その後蘊姉さまが結婚して、莎菲は蘊姉さまとの親密な関係を失ってしまった。その喪失感のために、小説の冒頭から憂鬱な気持ちでいるのである。また、自分に良くしてくれ

る友人の毓芳を親友と思えないのも、その前に蘊姉さまという特別な存在があったからであろう。毓芳は蘊姉さまのように「理解・抱擁・慰撫」してくれる、普通の友情を超えた特別な存在にまではなりえない。だから莎菲は、毓芳のことも親友とは考えられないのである。

この莎菲の蘊姉さまに対する気持ちは、常彬の言うところの普通の友情を超えた、けれども性的関係の伴わない「同性間の情誼」であると言える。莎菲は蘊姉さまに対し、友情を超えた特別な愛情を抱いていたのである。これが普通の友人なら、蘊姉さまが結婚しようとも、従来通り友情を続けることもできるだろう。しかし、莎菲はそれでは我慢することができない。莎菲は蘊姉さまにとって一番の存在でありたかったのだ。だから莎菲は、蘊姉さまを自分から奪った相手の男性を「もし彼女が神に翻弄されたようにあの蒼白い男を愛しさえしなかったら、こんなに早く死にはしなかったろうし、私もひとりで北京へ流れつき親しみも愛もなく病床に呻吟することもなかったろう」（三月二十一日夜）[29] と言って恨むのである。

莎菲が毓芳と、蘊姉さまとのようには親密になることができないのも、同じ理由によるものと考えられる。つまり、毓芳にはすでに雲霖という恋人がいるため、毓芳にとって最も愛する人は雲霖ということになる。だから毓芳がどんなに親切な友人であっても、彼女にとっての一番の存在にはなれず、そのため莎菲は彼女を特別な存在とは見なすことができないのである。

莎菲が同性に対して精神的な愛情を求めていたことは、他の登場人物からもうかがうことができる。それは、剣如という名の友人である。十二月二十八日の日記に、莎菲は「剣如！　彼女はどんなに私の自尊心を傷つけたことだろう。彼女の容貌や動作が幼いころいちばん仲のよかった友人にそっくりだったので、いつしか彼女のあとを追い、彼女の方

もわざわざ近づく勇気を与えてくれたのであったが、その後実にたえがたい仕打をうけたのだ。思い出すたびにあの過去の、悔いても及ばぬ無頼な行為がなさけなくなる。というのは、一週間の間に長い手紙を八通も彼女に書いたが見向きもしてくれなかったのである[30]」と書いている。

莎菲はその後、剣如を嫌って避けるようになる。だがそれは、一度彼女と親密になろうとして接近したが、自分が思うほどには相手は自分のことを思ってくれず、失望したためであった。この場合においても、単なる友情であれば相手の思いが自分ほどでなかったとしても、そこまで気にする必要はないはずである。しかし、莎菲は相手にも自分を特別に思ってもらわないことには我慢ができない。それは、相手に求めているのが単なる友情ではなく、恋愛にも似た特別な友情だからである。莎菲はすでに蘊姉さまという特別な存在を失ってしまったために、その代わりに精神的な愛情を与えてくれる女友達を求めていたのである。

莎菲は凌吉士の容貌に恋しているものの、彼の思想については嫌悪している。そして、蘊姉さまを失った後もやはり剣如という女性に対して親密な関係を求めている。このことは、莎菲にとって精神的な愛情を求める対象が、常に女性であったことを示している。つまり、莎菲にとって男性ははなから精神的に理解し合える相手としては考えられていなかったと言うことができるのである。

（二）毓芳と「新思想旧道徳」

蘊姉さまという精神的な愛情を失ってしまった莎菲は、独り北京へやって来る。そして、そんな彼女に最も優しくしてくれた友人が、毓芳であった。毓芳は、いつも親身になって莎菲の身の回りの世話を焼いてくれる。しかし莎菲はそ

んな毓芳を「人がいい」「嘘がつけない」「いい人間」とは思いながらも、彼女の思想を嘲笑している。なぜ莎菲は、親切な友人にまでこうした厳しい批判を与えなければならなかったのだろうか。

莎菲が毓芳を批判する理由は、日記の以下の部分からうかがうことができる。

彼らはほんとうに幸福だと私は思った。毓芳には雲霖という愛人がいて二人とも満足している。幸福は、愛人のあることではなくて、二人ともそれ以上の欲望がなく、平穏無事に暮そうと話しあうところにあるのだ。もちろんそうした平凡に甘んじない人もあるが、それはその人だけのことであって、私の毓芳とは関係のないことだ。（一月一日[31]）

世の中には、こんな一組の人間も現われるものだ。子供ができるのを恐れて、一緒に住むことを避けるような。（中略）この禁欲主義者よ、なぜあの恋人の露わな肉体を抱擁しようとしないのか。なぜこの愛の表現をおさえようというのか。なぜ二人がまだ床を共にしないうちに余計な心配をするのか。私は、恋愛とはこんな理智的な、こんな科学的なものとは思わない。（一月十二日[32]）

莎菲は雲霖と毓芳の恋愛を、「平凡」で「禁欲主義者」だと言って批判している。この批判は、章錫琛の唱える「霊肉一致」の「新性道徳」に重なるものである。莎菲はさらに、以下のように書いている。

毓芳はいい人間だ。彼女には雲霖がいるので、「およそ天下の情あるものがすべて眷族になることを願って」いるのだ。彼女は去年瑪麗のために一度恋愛結婚の仲立ちになったことがある。彼女はまた私が葦弟と仲よしになるようにと望んでいる。（一月一日）[33]

毓芳は前年、瑪麗のために「恋愛結婚」の仲立ちとなっており、莎菲と葦弟も同じように仲良くなって「恋愛結婚」することを望んでいるが、このことも、莎菲は快く思っていない。それは、これが「結婚のための恋愛」だからであろう。莎菲は「彼女はまた私が葦弟と仲よしになるようにと望んでいる」と書いたすぐ後に、「それにしてもあのノッポさんは実に素敵だ」と言って、毓芳の思惑から逃れたいかのように凌吉士のことに思いを巡らせ始めるのである。

ここで、毓芳は「新思想旧道徳」の女性であると言えよう。毓芳は北京の学校で教育を受けているという点で、「新思想」である。また、結婚するまで貞操を固く守っているという点で、「旧道徳」である。当時において恋愛結婚は新しいものであり、女性は恋愛結婚によってこそ男女平等を得られるとも考えられていた。だが、結婚前に女性が貞操を失えば、後で悲惨な結末を迎えるかもしれない。したがって、こうした「新思想旧道徳」の生き方は、知識人女性にとって比較的現実的で、多くの人々から支持されうるものであった。しかし莎菲は「霊肉一致」の恋愛を理想としており、また「良妻賢母」となるための結婚を望んではおらず、「禁慾主義」の恋愛や「良妻賢母」となるための結婚を否定したかった。そのために、莎菲は優しい友人のことを敢えて批判する必要があったのである。

（三）莎菲の恋愛・結婚観から読む「莎菲女士の日記」

ここで、この莎菲の恋愛・結婚観に基づいて、「莎菲女士の日記」を解釈したい。莎菲ははじめ、蘊姉さまとの「精神的な愛」で満たされた生活を送っていた。この時、蘊姉さまは莎菲にとって特別な、何でも理解し合える存在だった。しかし蘊姉さまの結婚によって、莎菲は「精神的な愛」を失ってしまう。「精神的な愛」を失った莎菲は、北京で剣如という女友達と親密な関係を築こうとするが、失敗する。また、毓芳という友人がいつも優しく接してくれたが、彼女にはすでに雲霖という恋人がいるため、彼女とは親密な関係を築きえない。その上、莎菲は毓芳の「新思想旧道徳」な生き方には満足することができず、彼女が勧める葦弟との恋愛結婚にも乗り気でない。

そんな時、莎菲は凌吉士に出会い、彼の容貌に恋をする。しかし、妻がいながら他の女性と恋愛したり遊郭に行ったりする吉士は、莎菲にとってはなから理解し合える存在ではなかった。莎菲は彼に「精神的な愛」を求めることはできないと知りつつ、欲望を押さえきれずに彼のキスを求めて恋愛の駆け引きを続ける。そしてついに、彼からのキスを得た莎菲は「勝った！」と思う。しかし、莎菲は駆け引きに「勝った」ものの、得られたのは「肉体的な愛」にすぎない。「霊肉一致」の恋愛を理想とする莎菲は、「肉体的な愛」だけではもちろん満足できない。そのため結局、莎菲は北京で自分が満足できるような人間関係を築くことができず、独り北京を去るのである。このように、莎菲は「精神的な愛」、「新思想旧道徳」、「肉体的な愛」という経過をたどって、最後、どこにも理想とする生き方を見つけられずに失望して終わるのである。

以上で見たように、この作品で莎菲は、単に凌吉士と葦弟という二人の男性の間でのジレンマにあったのではなく、女性同士の親密な関係、新思想旧道徳の友人たちへの反発、通俗的な知識人男性への欲望といった、より複雑な状況に

置かれていた。そして莎菲を含めたこれら登場人物たちの生き方は、いずれも中国一九二〇年代末期の都市において、新しい生き方として存在していたのであった。丁玲は莎菲の姿を通して「新思想旧道徳」という当時においては多くの人々から支持されうる女性像を否定し、批判の的であった「モダンガール」としての生き方を示した。この作品において莎菲は親切な友人である毓芳を見下す態度を取っているために、いくらか自分勝手でわがままな女性にも映るが、こうした莎菲の姿を通じて、当時多くの人々から支持された「新思想旧道徳」という生き方に対して大胆な批判を与えたことは、この作品の大きな魅力の一つとなっていると言えよう。そして丁玲があえて批判されることの多かった「モダンガール」を主人公にしたのは、丁玲が専ら若い女性の恋愛をめぐる物語を書いていた初期においても、幸せな結婚をすることだけを理想としていたのではなく、いかにして自立した生き方ができるかという問いを抱いていたことを示していると言えるだろう。

注

（1）錢謙吾「丁玲」『現代中國女作家』北新書局、一九三一年、一八六－一八七頁。

（2）茅盾「女作家丁玲」『文芸月報』第二号、一九三三年七月十五日、二〇〇頁。

（3）周扬「文艺战线上的一场大辩论」、人民日报出版社『活页文选』新三十一号、一九五八年三月二日（袁良骏編『丁玲研究資料』天津人民出版社、一九八二年、四一四頁より引用）。

（4）袁良骏「毁誉褒贬之间――谈谈『莎菲女士的日记』」『十月』第一期、一九八〇年一月、二五〇－二五一頁。

（5）江上幸子「近代中国の「新婦女」言説と「新女性」丁玲」『アジア女性の社会的地位（二）』フェリス女子学院大学、二

〇〇三年。

(6) 廖钦・陈锐峰「试论莎菲女士的形象——兼评姚文元『莎菲女士们的自由王国』一文」(『贵州师范大学学报(社会科学版)』一九八一年、四三頁)では、凌吉士のことを「他的志趣完全是一位旧社会地地道道的资产阶级大少爷，是旧社会的宠儿，也是一位旧社会所风尚的人物」としている。

(7) 张辽民「莎菲在幻灭、追求中获得新生——兼评姚文元的『莎菲女士们的自由王国』及其他」(『中国现代文学研究丛刊』一九八〇年、八一頁)に、「在莎菲看来，苇弟这种想独占她的感情的心理和干涉她爱的权利的行为，正是庸俗的封建道德观念在爱情问题上的自私表现，也是她一贯尊奉的女性尊严所不能容忍的，因此，她决定用爱凌吉士来逼苇弟死心」と述べられている。

(8) 张永泉「在黑暗中寻求光明的女性——莎菲形象的再评价」(『中国现代文学研究丛刊』一九八三年、一六三頁)に、「她对感情的执着追求中，从她对毓芳、云霖的戴着枷锁跳舞式的恋爱的嘲笑中，可以看出她对父母之命，媒妁之言的封建婚姻会抱有多么强烈的反对态度」とある。しかし、雲霖と毓芳のカップルは「父母の命」「媒酌の言」によるものではない。

(9) この作品の邦訳には他に、尾坂徳司・岡本隆三共訳『丁玲作品集　新中國文學選集』(青木文庫、一九五三年)に収められた「莎菲(シャーフェイ)女士の日記」がある。翻訳の正確さでは尾坂・岡本訳の方が優れていると考え、本論文では岡崎訳を使用した。

(10) 俞寄凡「戀愛和性慾的關係」『婦女雜誌』第七巻第六号(一九二一年六月)、Y.D.(原著・本間久雄)「戀愛的移動性與一夫一婦制的改造」第八巻第九号(一九二二年九月)、陳德徵「性愛的價值」第八巻第九号(一九二二年九月)、Y.D.「自由戀愛與戀愛自由」第九巻第二号(一九二三年二月)、Y.D.「自由戀愛與戀愛自由續篇」第九巻第二号(一九二三年二月)、章錫琛「讀鳳子女士和Y.D.先生的討論」第九巻第二号(一九二三年二月)等。

(11) 「新道德是什麼」『婦女雜誌』第十一巻第一号、一九二五年一月、二-七頁(中国女性史研究会『中国女性の一〇〇年史料にみる歩み』青木書店、二〇〇四年三月、八三頁の訳による)。

(12) 長劍「儀式」『新女性』第三巻第三期、一九二八年三月、二八三-二八四頁。

(13) 黄亞中「戀愛的悲劇」『婦女雜誌』第九巻第十二号、一九二三年十二月、三七-四一頁。

(14) 劉維坤「黄女士的自述」『婦女雜誌』第十巻第二号、一九二四年二月、三六八-三六九頁。

(15) 豈凡「馬振華的自殺及世評」『新女性』第三巻第四号、一九二八年四月、三六四－三七一頁。
(16) 余华林『女性的〝重塑〟――民国城市妇女婚姻问题研究』商务印书馆、二〇〇九年、七二頁。
(17) 冉子「摩登婦女與賢妻良母」、天津『大公報』一九三一年七月二十九日（余华林『女性的〝重塑〟――民国城市妇女婚姻问题研究』商务印书馆、二〇〇九年、四二三頁より引用）。
(18) 董玥「谁惧怕摩登女郎？」『娱悦大众 民国上海女性文化解读』上海辞书出版社、二〇一〇年二月、一六二－一六八頁。
(19) 余华林『女性的〝重塑〟――民国城市妇女婚姻问题研究』商务印书馆、二〇〇九年、四二一頁。
(20) 章錫琛「新思想舊道德的新女子」『新女性』第三巻第六号、一九二八年六月、六一〇頁。
(21) 丁玲「暑假中」（一九二八年）「歲暮」（一九二九年）、廬隠「麗石的日記」（一九二三年）「海浜故人」（一九二三年）「漂泊的女児」（一九三二年）、凌叔華「説有這麽一回事」（一九二六年）等。
(22) 刘传霞『被建构的女性 中国現代文学社会性別研究』斉魯书社、二〇〇七年十月、二八一頁。なお、女性同士の同性愛自体は、中国において古くから存在していたようである。R.H.フーリック著、松平いを子訳『古代中国の性生活 先秦から明代まで』（せりか書房、一九八八年一月）には「女性の同性愛については、寛容な態度がとられており、おおぜいの女たちが長期間つねに間近にくらすことを強いられていれば、女同士の同性愛は避け難いということも認められていた」（七五頁）との記述がある。
(23) 常彬『中国女性文学话语流变一八九八―一九四九』人民出版社、二〇〇七年、一七五頁。
(24) 同、一七五頁。
(25) 岡崎俊夫訳「莎菲（ソフィ）女士の日記」『霞村にいた時』岩波書店、一九五六年、六、七頁。
(26) 同、九頁。
(27) 同、三六－三七頁。
(28) 同、四三、四四頁。
(29) 同、四四頁。
(30) 同、一〇頁。
(31) 同、一三頁。

(32) 同、二一頁。
(33) 同、一三－一四頁。